

May
号外
2019

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

vol.11 Document



発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング
問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当:CEL弘本)
ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

今回のフォーラムでは、都市考古学のフロンティア、大阪・上町台地での丹念な発掘調査の成果を、時空を越えるスコープとして、人文地理学や都市文化論、地域産業や生活史の視点を持ち寄り、まちが生まれ都市が形づくられ営まれていくダイナミズムに着目。ものづくりとの関係性の中で、今に続くストーリーとして捉え直していくことを試みました。

上町台地の谷々に最先端のものづくりの工房が集積した古墳時代に遡り、近世の大坂城下町が技術と文化の連鎖する高密度な共創空間であった様子からその先まで。時を駆けて未来に続く原風景を目覚めさせ、これからのまちづくりの魁とはいかなるものか、ともに探り市民の知として共有する場とする、クロスオーバー・トークを展開しました。

第11回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。

クロスオーバー・トーク：時空を越えるスコープで

目覚める“上町台地バレー”から、
まちづくりの魁・ものづくりの都の実相に迫る

さきがけ



※上町台地の立体模型(5000分の1) 国土地理院の地形図をもとにして作成。
水辺距離に対して垂直距離を15倍の比率にして地形の起伏を強調している。



▲壁新聞
「上町台地 今昔タイムズ」第11号(1面)

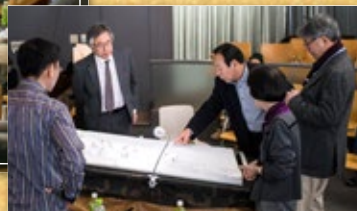


上町台地 今昔タイムズ*第11号では、「難波宮前夜から天下の台所を経て大坂とその後へ 足下に眠る“上町台地バレー”まちづくりの魁・ものづくりの都が姿を現す」をテーマに、近年の発掘調査の積み重ねから明らかになってきた、ものづくりの都・大阪の実相に迫りました。

*プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」[U-CoRo]で検索してご覧いただけます。



- 日時：2019年2月24日(日) 14:00～17:00
- 場所：大阪ガス実験集合住宅 NEXT21
2階ホール(大阪市天王寺区清水谷町6-16)
- 主催：大阪ガス エネルギー・文化研究所(CEL)
企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング

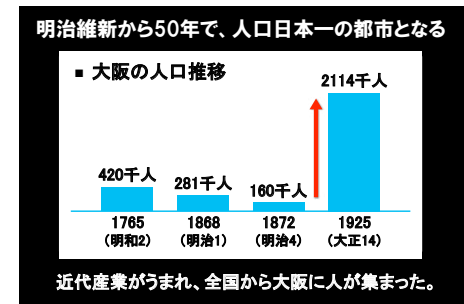


コメンテーター：

加藤政洋(立命館大学文学部 教授)
藤田 富美恵(童話作家)
佐藤 隆(大阪市教育委員会文化財保護課 主任学芸員)

モデレーター：

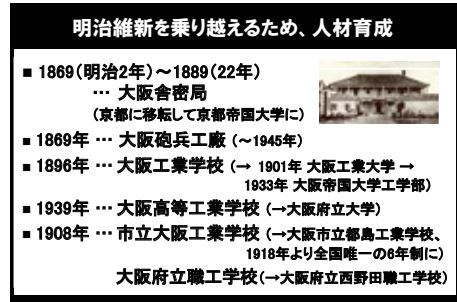
池永寛明(大阪ガス エネルギー・文化研究所 所長※)
(順不同、敬称略 ※肩書きは開催当時)



切なことは人材でした。「天下の台所」をつくりあげた大坂の町人たちは、多面的に情報を集め、融合・混じりあわせ、五感を働かせ、「想像力」と「翻訳力」にて新たなモノをつくり、実験・試行錯誤を繰り返し、価値創造していきました。

昔の大坂は、日本一勉強した都市でした。商人、職人が毎日毎晩、私塾、講に通い猛烈に勉強しました。町人にとっての勉強は教養にとどまらないもので、知識人としてのプラットフォームを鍛え、仕事につながるものでした。

明治以降も学校が次々できています。西野田・今宮職工学校の校憲第1条に「学校ラシキ学校トナスニアラスシテ工場ラシキ学校トナスニアリ」とあるように、実務・実践教育が重視されました。



大阪砲兵工廠も多くの人材を育て産業基盤を培っていきます。1915年からの

部品の民間委託開始に伴い、周辺に砲兵工廠で技術を学んだ人々が起業した民間工場や機械商が急増しました。

さらに大坂の時代は、「商都」と「工都」が組み合わせられて、経済システムの付加価値の創造は「天下の台所」の仕組みを承継するものでした。

中国の深圳は日本に学んだ

中国の深圳は30年前30万人だった人口が1400万人になりました。日々成長し「進化」しつづける都市と言えます。20～30歳代が65%を占める若い都市で、中国全土や世界から若者たちがチャイナドリームを目指す「挑戦」都市です。秋葉原の30倍、世界最大の電気街「華強北（ホクチャンバイ）」では、見たことのあるモノ、見たことのないモノ、あらゆる製品・部品が揃います。世界中の技術者たちが深圳に集まり、起業に向けて切磋琢磨し、技術を形にして、社会に広げる。ここで起業した若者たちの目は中国国内だけでなく、世界を捉えています。

「深圳速度」が深圳をつくる。湧いたアイデアを1時間以内に「形」にして、市場に投入し実験する。市場の反応に耳を傾け、すぐさま修正し、また実験する。

こうしたことを深圳で議論すると、深圳の成長の本質は日本に学び、学んだことを忠実に実践しているのだという声が多い。反対に、日本はそのことを忘れてしまっているようです。



「天下の台所」の担い手たちは、北海道の海藻を見て、昆布に加工し、出汁をつくり、日本料理をうみだした。翻訳能力を駆使して、「生業（なりわい）」を次々とつくりだした。そういう土地柄。大阪が弱まっているものは、外から来たコード（本質）を翻訳してモード（様式・方法論）化する力。「五感」を磨き、多様な事柄を視て聴き考えて、行動する力ではないか。

それでは、3人のコメンテーターから、「まちが生まれ、都市が形づくられていくダイナミズムとものづくりの関係」についてお話いただきます。



■谷に残る、ものづくりの痕跡

佐藤 隆

(大阪市教育委員会文化財保護課 主任学芸員)

さとう・たかし 1989年から大阪市文化財協会で、大阪市内の発掘調査に従事。中央区の難波宮跡・大坂城跡や平野区長原遺跡・喜連東遺跡など、多くの遺跡の発掘調査を担当。2001～06年、大阪歴史博物館学芸員。2012年から現職。専門分野は日本考古学、陶磁史。

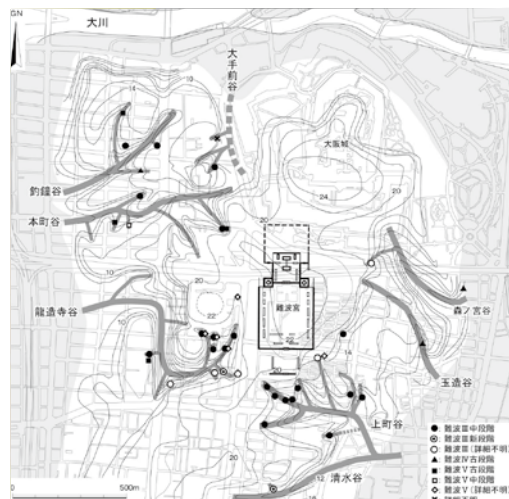
台地の谷はタイムカプセル

「今昔タイムズ」11号にも紹介されているように、古代から上町台地には谷はたくさんあります。谷は、昔から生活の場としては使いにくいところ。そこには、古代から人々がものを捨てていたわけです。その積み重ねを私たちは発掘して、それにより昔の人の営みを考え

ています。

さらに時代が進んでいくと、例えば難波宮のような宮殿ができて、その都つくりのために平地を確保しようということで、また谷を埋めていくわけです。

古代の地形がどうだったかは、これまでの発掘調査の成果をあわせ、大阪文化財研究所や大阪歴史博物館などの共同研究からわかってきています。



難波宮周辺の地形と整地の時期 (寺井誠「孝徳期における古代難波の都市建造とその後」日本考古学協会第73回総会 研究発表要旨 2007年に加筆)

谷に残る、ものづくりの痕跡

難波宮の周辺の高低差を等高線で表し、谷を線で図示したのを見ると、難波宮はこの付近でもっとも平面が確保



「本町谷」で見つかった、7世紀の湧き水を溜める施設では、発掘時にも遺構に水が湧き出ていた

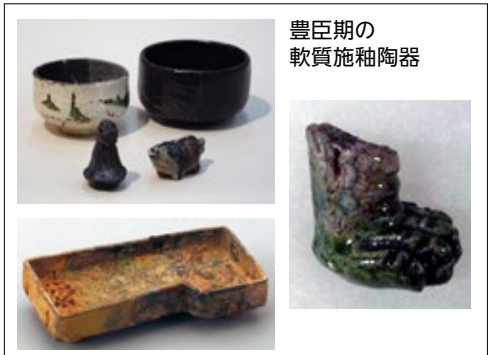
できる場所を選んでつくられているのがわかります。同時に、周辺の谷部を埋めていき、平面をできるだけ広く確保しようとしています。整地の時期も、難波宮跡のところが古く、周辺に行くほど新しくなっています。

今のNHKと大阪歴史博物館のあたりは、「本町谷」がはじまっているところで、そこに、7世紀の湧き水を溜める施設が見つかっています。前期難波宮の時代に、水を利用し、流していた施設です。この発掘現場では、朝になると水が溜まっていた。ちょっと掘ると吹くようにきれいな水が出てきました。

「龍造寺谷」の一部からは、7世紀中ごろで最古の万葉仮名文木簡が出ています。「皮留久佐乃皮斯米之刀斯（はるくさのはじめのとし）」と書かれていました。国立病院機構大阪医療センターでも、柱穴が出ており、ものづくりの痕跡では、木製品で鏃のようなものが出ています。こんな製品をつくらうという見本のようなものと考えられます。

少し南の「上町谷」でも、掘ると谷の一部が出てきます。ここでも木簡「斯々一古（ししいっこ）」が出ています。「一古」はひとくりというような意味です。

後期難波宮の段階の石組の溝も出ま



出土した豊臣期の軟質施釉陶器。右の獅子の足は楽焼の獅子香炉に形がよく似た例がある



後期難波宮の南側から出た底に石を敷いた水路遺構は、都の排水施設か

した。石が底に敷いてあるちゃんとした水路で、宮殿の真南にあるので、排水のために整えたのではないかと思います。前期難波宮で都づくりのために谷を埋め、後期難波宮でもそれを踏襲して、またそこを掘りこんで水路などで使っているのですが、都づくりのなかで谷がどんどん埋められているわけです。

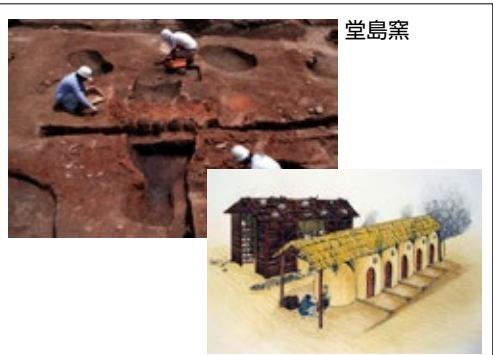
そこから南の「清水谷」の遺跡は、空清の市営住宅の真下にありました。

さらに南に行くと、和同開珎の枝銭が出たので知られる「細工谷」の遺跡があります。谷を挟んで、2つの寺の痕跡が出土しています。一方は堂々芝廃寺。古代の文献から百済寺ではないかと考えられます。向かいの場所からは「百済尼」とか「百済尼寺」という墨書土器が出ており、百済寺と百済尼寺が谷を挟んであったのではないかと考えられています。

豊臣期～江戸時代の陶器生産

近世については、秀吉が大坂城を築いた段階から、徳川の世になるなかで、ものづくりの実態を示すような工房跡などが出ています。

豊臣期の軟質施釉陶器は、鉛釉などを使って比較的低火度で小規模な窯で



18世紀初頭の堂島窯跡発掘の様子と連房式登り窯の想像図



和同開珎の枝銭出土で知られる細工谷遺跡では、井戸の遺構や「百済尼」「百済尼寺」の墨書土器が出ている

焼かれたものです。色を付けたものや黒茶碗、これは黒楽とほとんど変わらないものが出てきます。

織部も出ています。こういうものを試作品的につくり、お茶会などで受けが良かったら、美濃などで大規模生産に移すというように考えると、大坂でこういう生産の試みがあったこともうまく説明できるのではないかと考えています。

樂家の二代目常慶作の獅子香炉と類似している獅子の足も出ています。今、樂家は京都にありますが、元々は秀吉について活動しており、当時の拠点は大阪か堺だったのではないかと考えられています。

大坂夏の陣以降の軟質施釉陶器も出ていますが、一度素焼きをして、それに釉薬をかけてもう一度焼いています。ここでは釉薬をかける前の製品も出ていたので、工房の存在が考えられます。また、黒楽によく似た黒茶碗をつくる工房もありました。

江戸時代、18世紀初頭の中之島の北側の福島あたりに、蔵屋敷が建ち並んでいたところですが、その下層から連房式登り窯が出ています。もうひとつ、素焼きをしたのではないかと、鍵穴型の平面をもつ窯の遺構もありました。



瓦屋町遺跡から出土した多種多様な土製人形や土型類

京焼に似た上品な感じの薄い焼き物も出ており、すり鉢なども焼いています。

ここでは、いろんなことを実験的にやったのではないか。この窯は、18世紀初頭の一時期のものです。特にここの形式のすり鉢は、やがて堺で大量生産されるようになって、備前のすり鉢を駆逐するくらいものになります。直接的なつながりがもしかするとあるのかも知れません。陶器の絵柄なども、結構京焼につながっているような印象があります。それから、「今昔タイムズ」11号にも紹介されている瓦屋町遺跡は、近世瓦づ

くりで大きな勢力をもっていた寺島家が管理していた土地の一部かその周辺の地。瓦づくりの工房の道具が出ていますが、それに混じって陶器づくりの窯道具などが出ています。焙烙^{ほうろく}といって、ペンガラという赤い顔料をつくるものもあり、また、人形の型も出ており、ここで人形も焼いていたことがわかります。銅製品を铸造する際の鋳型も出ています。

◇

池永 難波宮の以前から、台地の上には、ものづくりの場があったんですね。佐藤 遡ると5世紀の段階から、この地

には人々が住んでいて、ものづくりをしていたわけです。南方にある百舌鳥古墳群や古市古墳群などと同じ時期から、この場所が関西というか、日本の中心だったのではないかと思います。

池永 海の方から見たら、この台地だけが海の上に浮いているように見えた？佐藤 当時、難波津という港がこの付近にあったはず。そこへ、瀬戸内海を通してたくさんの船がやってくる。船中からは、上町台地の先端あたりの建物は、海から見上げるような感じになったでしょうね。

人

■想像力／創造力をはぐくむ社会・空間的な集積が重要

加藤政洋

(立命館大学文学部 教授)



かとう・まさひろ 信州諏訪生まれ。博士（文学）。専門は人文地理学。まちを実際に歩き、空間の成り立ちから都市を考える。著書に『大阪のスラムと盛り場』、『花街』、『敗戦と赤線』、『京の花街ものがたり』、『神戸の花街・盛り場考』、『那覇』など。新著に『大阪―都市の記憶を掘り起こす』（2019年4月刊）



都市とは出会いの空間

佐藤さんの今のお話、私も非常に興味があります。朝鮮半島から船で渡ってきた人が海から見た上町台地の様子を、誰かCGで再現してほしい。この模型は高さの比率を15倍にしているそうです。古代からの各種施設が立地を選んでつくられている様子がよくわかります。

私なりに、都市とは何かと問われたときに、一言で言うなら、それは「出会いの空間」だと考えています。様々な出会いが織りなされることで、都市が都市らしさを獲得していく。そこには地域性もあり、池永所長が言っているような、大阪の個性が生まれてきているわけです。

ここで、ウィリアム・ジョン・ミッチェルのある種寓話的な一文を引用します。

昔々、砂漠の中に小さな村がありました。その中心には井戸がありました。水がめを運ぶには大変なので、家々は井戸の周辺に固まっていました。夕方涼しくなる

と、人々は翌日の水を汲みに井戸へと集まり、すぐには帰らずに互いに噂話に花を咲かせたり物を交換したりしていました。井戸は生きるのに不可欠な水を汲む場所ですが、と同時に社会の中心であり、人々が交流するための集会所だったのです。そして水道管がつくられました。こんな便利なものを欲しがらない人など実際にいるでしょうか？ さらに良いこともありました。子供たちはコレラにかからなくなりました。人口は増え、村は大きな町へと成長しました。水道管が引ければどこに家を建てても水が使えるからです。住居は、もはや古い中心部に集中しなくてもよくなりました。そして人々は井戸に集まることを止めました。いつでもどこでも水が出るからです。ついに水源の周りの場所は、かつての公共機能を失いました。人々は社交場として、広場や市場やカフェと



いった新しいもつと時代に合った特別な場所をつくりあげていきました。／今、歴史は繰り返そうとしています…。(『e-トピア：新しい都市創造の原理』)

本のタイトルは『e-トピア』。現在のように、電子の空間が社会の中に生み出されてきたときに、人と人が実際に会うことなしに、都市が都市として、また、社会が社会として成立してしまう。そういう状況を揶揄しています。

都市の原初形態と水

佐藤さんのお話の、上町台地の谷での発掘中に水が湧いてきたというのが印象的でした。古い地図で上町台地付近を見ていると溜め池が随所に見られます。あべのキューズモール付近にも溜め池がありました。おそらくは水が湧いていて、池から流れ出る川に沿ったところにだけ、水田の土地利用がある。古い地図では、同様のところを上町台地周辺の随所に見ることができます。やはり、水が湧き出るところは、ある意味で人が集まるところで、それが、都市の原初形態と見て取ることができます。

このことは、フランスの記号学者ロラン・バルトも随分古くに言っています。

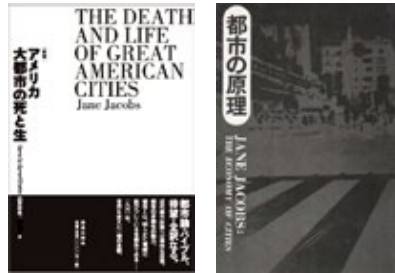
都市は、本質的に、また意味論的に、他者との出会いの場であり、まさにこの理由によって、中心部はどの都市においても集合地点となるのです。…(略)… 中心街は、社会的活動や、語の広い意味においてエロスの活動と言ってよい活動の交換の場として生きられます。もつと適切に言えば、中心街はつねに、さまざまな秩序壊乱のな力、断絶の力、遊戯的な力が働き衝突する空間として生きられます。(「記号学と都市計画」)

「出会いの場」というのは、人と人だけでなく、貨幣と商品の交換の場とも言えるかも知れません。あるいは、知識経済学が言うところの知と知が混じり合うことによって、イノベーションが起こる、それもまた、出会いの場だと言えます。我々がこうやって上町台地のこの場所に集まっているのも、出会いの場で、ここに新しい知が生まれてくるでしょう。つまり、ある種の結節点の役割を果たすのが都市の中心的な役割だと思います。

イタリアの思想家ベラルディはメトロポリス、巨大都市についてこう語ります。

都市、それは人間による文明化が生み出してきたもつとも基礎的な産物である。それは、接触しあう人間たちによって商品や思想が交換される十字路となり、ブルジョア時代に完成した。この都市が今日では、メトロポリスがもたらす過剰な蛇足的拡大の時期を迎えるようになった。メトロポリスとは、都市機能の過剰栄養摂取状態のことだが、それは同時に都市機能の爆発、すなわち都市の存立そのものが不可能となる事態でさえあるのだ。都市においては、出会いを通じて、人々はお互いを知ることになる。だが、メトロポリスにおける出会いでは、お互いを知る必要などはない。都市では人間はエロティックに接触しあうのだが、メトロポリスにおける接触はボルノグラフィックなのである。(『NO FUTURE』)

都市というものが、電子的な媒体、あるいは接触を伴うことなく交換がなされてしまう状態に差し替わりつつあるなかで、いったいどうなるのだろうか、このイタリアの思想家は批判的に言っている。この時代の都市は、ある種の岐路に立たされているのだと言えるでしょう。



はじめに都市ありき

私は、「今昔タイムズ」11号の1面にある一文、「都市の起源が、ものづくりとともにあることを物語っています」というのを見た瞬間、あるひとりの人物を想起しました。それはジェイン・ジェイコブズというアメリカの女性の運動家です。1961年に『アメリカ大都市の死と生』を出版し、現在の「まちづくり」活動の基礎になるような考え方を提示した人です。

『都市の原理』(原書は“The Economy of Cities”)のなかで、彼女は非常に面白いところに注目します。「はじめに都市ありき」、これは彼女の言葉ですが、都市は農業に先行して生まれている。つまり原始農耕が生まれる以前に都市が生まれたのだと強調しています。

彼女は、チャタル・ヒュウクの新石器時代の都市的遺構に注目します。紀元前7500年に遡る世界最古級の都市遺跡で、現在のトルコのアナトリアで発見されています。彼女は、チャタル・ヒュウクは、職人の都市であり、芸術家の都市、製造業者の都市、商人の都市だと言います。一般的に交通の結節点になるところが都市として発展したのだと言われますが、彼女は、交通の要衝で都市になったところでは、必ず生産、ものづくりの基盤が備わっていたところだと言うのです。

どんな人がチャタル・ヒュウクに住んでいたかは、発掘されたものから見て取ることができます。「織物師と籠づくりの職人、大工と指物師、磨き石器をつくる職人、ビーズ細工職人、碎石職人、矢頭やナイフをつくる職人、小間物をつくる職人、建築士、商人・交易人、彫刻家や画家などの芸術家……」。

後背の地域が成立する以前から、こうした職人たちが集住する都市的な場ができる。さらにそこが交通の結節点であ

るために、様々なものが持ち込まれ、技術革新が生まれ、それが世間に伝播していくという考えです。つまり、農村の余剰経済が始まる以前から、都市的な場ができていったということで、むしろ、そういう「創造的な地域経済」を有する都市があったがゆえに周辺に農耕文化が生まれてくるだろうと言っています。

私なりにその本の要点を述べると、池永所長と期せずして重なったのですが、「想像力／創造力をはぐくむ社会・空間的な集積」が重要だということです。

最後にジェイコブズが言っている印象的な一文を紹介します。それは、「巨大都市はその規模に比例した大きな地元経済の中に多くの新しいものを付け加えながら古くからの技術や組織を担保する余裕をもっているものなのだ」というもの。たとえば、映画が出てくると劇場がまったく駆逐されてしまうのではなく、劇場を残しながら映画館も取り入れる。さらにテレビの登場で映画館が駆逐されるのではなく、古いものを残しながら新しいものを取り入れていくということでした。

その意味で大阪では、生産の場を都市の外へ外へと押し出してきたとも言えるわけですが、都市の空間的広がりのなかに、懐の深さを活かして、様々な新旧の、そして生産の場のようなものが今日存在することによって、新しいことも生まれてくるのだらうと思われます。

◇

池永 新旧混じりあうというのはキーワードだと私も思います。そういう風土はどこから生まれると思いますか。

加藤 新しいものに飛びついて、そのための空間をつくり、機能と空間を1対1で対応させてしまうのではない、ミックスな空間用途が重要で、大阪は、そういうところに寛容だったと思います。京都の岡崎公園や平安神宮は、明治の第四回内国勸業博覧会の跡地利用ですが、大阪の第五回内国博の跡地は天王寺公園と新世界です。文化施設と歓楽街、一見すると相容れないものの併存。「節度ある寛容」がキーワードになってくる。そこが大阪の特性だと思います。

人



ふじた・ふみえ 童話作家として、路地のまちの暮らしと多世代の交流を描いてきた。実父の秋田實の追想記『父の背中』（潮出版社）で第8回潮賞ノンフィクション部門受賞。その他の著書に『からほり亭で漫才！』『玉造日の出通り三光館』『秋田實 笑いの変遷』など。

藤田富美恵

（童話作家）

「アサヒグラフ」
（1984年9月15
日）掲載の路地
入口の写真

■路地の暮らしと ともにあったものづくり

長屋の路地で教わったこと

空堀の嫁ぎ先には母屋と離れがあり、私は路地に面した勝手口から出入りしていました。結婚当初、一步路地に出ると、いつも誰かが立ち話（笑）。最初は見張られていると思ったのが、だんだんと見守られてるに変わってきて、とても住みやすい町だなと思うようになりました。それで、子どもが大きくなって、手が離れたら、空堀や路地の良さを童話やエッセイに書いて残そうと思いはじめたわけです。

30数年前の路地写真を見ますと、手前は大谷石の石畳で奥は土の道。これは、昭和60年くらいにはまだ残っていました。写真手前はお祓い筋、左側はうちの家で路地の左側が勝手口でした。

路地の入口には共同表札、路地に住む家の表札がみな揚がっています。当時は、用事のない他の人はほとんど入れない空間でした。明治時代は表には扉があって、夜10時頃には閉めたそうです。路地を奥にずっと進んでいくと、両側にも長屋があり、突き当たった場所に井戸があって、水道も行き渡っていなかった時期は、その井戸で炊事もしたそうです。45軒が共同で使っていました。

路地は、夜は真っ暗になるので、街灯がついていました。その費用もみなで持つわけで、奥にいくほど割当金が高かったのは、奥の人の方が恩恵にあずかるから（笑）。45軒が仲良く住むには、不公平がないようにしておかないといけないし、炊事や洗い物、洗濯と、井戸の使い方にも、きつと順番があったと思います。路地に住むには、何もかもお互い様の思いが気持

ち良く生活する原点だと私は思います。

江戸～明治期の家業は晒蠟

この路地は、雇っていた職人さんの住まいに建てたもので、45軒あったと姑から聞いています。嫁ぎ先の家は晒蠟屋で、木蠟をつくっていました。ロウソクとか鬢付油に使われいて、明治の中頃には需要が多く、このあたりで盛んに製造されていました。

晒蠟を家業としていたのは、ここが高台で、水の質がすごく良かったからです。ロウソクは、ハゼの実を潰して脂肪分を取りだして、それを水で晒して陽で乾かしたのを原料につくります。晒す水がきれいでないとい良い蠟はできない。この一帯では真っ白な蠟ができるということで、当時はこういう家が5軒あったそうです。

明治の中頃が全盛期でしたが、だんだんに電気ができ、ロウソクの需要がなくなってきて、また鬢をゆう人もいなくなって、鬢付油もいらなくなった。それで、晒蠟の仕事は廃業し、職人さんが住んでいた家を借家にしたそうです。50数年前に私が嫁いだときも借家業でした。

職人さんは、丹波から来た人が多かったと聞いています。故郷へ帰る人、住み着く人、サラリーマンになった人もいたでしょうが、姑によると、このへんは心齋橋や船場、難波に近くて、簪とかペンダントや指輪、アクセサリーなどを必要とする店があったので、そういうものをつくる仕事を始めた人が多かったそうです。それから判子屋さん。また、ここは高台で、湿気が少ないので、紙関係のところも多かった。昭和60年頃の地域の地図を見ると紙屋や印刷屋、製本屋な



どがすごくたくさんあります。うちの路地にも紙の裁断屋さんがありました。

路地には、ムコガワという、雨の日に足袋のつま先が濡れないような下駄や履物のカバーをセルロイドでつくっていたところもありました。その家の娘さんは高齢ですが今もご健在で、以前にうかがった話では、すごく流行っていた時期には、動力ミシンを3台入れて、人も雇っていたそうです。路地の家は一軒が約10坪。入ったところが小さな玄関で、上がり框があり、左手が格子間で、ガラス戸を空けると路地が見えて、ちょっと話もできる。それから居間と台所が1階。奥には小さな庭。2階には二間。そういう家で、ものづくりしながら、家族を養っていたそうです。心齋橋の「履物屋の老舗「てんぐ」とか「おき宗」だけに卸していたと言っていました。

みなさん借家を大事に使って、うまく仕事を変えて生活していきました。10坪の家に2、3世代住んでいるところがほとんどで、表にお年寄りが出ているのも、家の中にいたら夏であれば暑いという事情もあったようですが、そんなことよりも、おしゃべりが楽しかったのでしょう。

路地はありがたい空間

うちの路地の入口を描いた切り絵もあります。左が我が家で、右側が魚屋さん。

路地の入口に魚を仕入れに行く自転車置き場があります。

路地では、めいめいが気ままでは住めません。私も住み始めて何年か経つと子どもが3人できました。その頃は、若い所帯もたくさん住んでいて、あまり保育園もなかったの、学齢前の子どもは路地を保育園がわりに育ちました。多くの親は内職をしていたので、子どもは路地に放り出されて、勝手に遊んでいましたが、お年寄りが自分のところの孫でなくとも見守ってくださった。表通りに出ないように注意してくれて、私も安心して家事することができました。ありがたい空間やなあと思います。

魚屋さんがあった表借家は3軒。魚屋さんの大きな自転車は、路地の入口に置かれるとちょっと邪魔（笑）。でも誰もそんなことは言わないのは、すべてお互い様だから。入口から路地を進むと突き当たって、右に曲がり、長屋の間を行って、もう一度右に曲がって進むと、表通りに出る。つまりU字型になっています。現在はリノベーションしているおうちもあるし、3軒の壁を壊してフリースペースにしているところもありますが、建てたときの骨格はみなそのまま残っています。

クロスオーバー・ トーク（後場）

記憶をつなぐことの重要性

池永 80何歳かの人が小さい子どもに話を伝え、それをもう一度、次の世代に伝えると、100何十年の話が伝わることになります。まさに藤田さんはそういうことを文字にして伝えていこうとされています。やはり記憶をつないでいくということが重要で、それはこの「上町台地 今昔タイムズ」や「今昔フォーラム」のテーマでもあるわけです。この記憶をつないでいくということで、新著『大阪一都市の記憶を掘り起こす』を出される加藤先生、どうお考えですか？

加藤 実際問題としては、同じ地で3

姑は常々、店子さんも合わせ全員で「一軒の家族、大家は親や」と言っていました。戦争中はご主人が戦争に行かれたおうちには、姑もおかずをつくって届けていたそうです。夫のお祖父さんも、困ったことはないかと一軒ずつきいて回ったそうです。当時は、互いに本心でそう思っで付き合っていたのではないかなと思うと、ちょっとうらやましいところもあります。

魚屋さんだったところは、今はリノベーションして、コミュニケーションスペースみたいなものにしています。地域の人が集まってエッセイを書いたり、落語会をしたり、それから漫才コンビが練習したりしています。そんな時は「漫才練習中」の札をかけて（笑）。じゃないと、声も大きいので喧嘩していると思われて通報されかねない（笑）。

◇

池永 嫁がれたときは、路地には明治生まれの人もいらした？

藤田 ええ、姑も30年代の生まれでした。空堀商店街の澤井亭という寄席があって、近所のお年寄りはそこへも行ったよと言っていました。ちょっとの間にすごく変わりました。

池永 そんな記憶を伝承しておられる。

ご来場のみなさまを交え、時空を越えて浮かび上がってきたストーリーと原風景から、未来に続くまちづくりの魁とはどうあるべきか、ともに探知を共有する場としました。

代続く家というのは、都市の場合は難しい。常に新陳代謝しているわけです。藤田さんのお話で、丹波出身の職人の方が多かったそうですが、京都でも西陣の機を支えていたのは例えば富山県の高岡の山の人だったりします。また、大阪も京都も、商人の出身地は近江だったりもします。だから、記憶そのものはいろいろと幅輳しています。そのなかで記憶を伝えていくことの難しさと、同時にその必要性と重要性を強く感じます。

藤田 私の父は明治38年生まれで、その親である私の祖父から聞いた話で思い出すのは、祖父の右手の親指の爪がなかったことです。私は子どもの頃に、そ



現在の表借家（下の切り絵と同所）



切り絵「お祓い筋の路地長屋」（加藤義昭作、「Chamber」大阪商工会議所、1992年6月号）

藤田 私の頃は姑の話はちゃんと聞かないといけなかった時代でしたが、今思うとそれが良かったです。私にとって大きな財産になっています。教科書では学べない、住んでいる人の知恵を近所のお年寄りから学ばせていただきました。

れが不思議で、「なんでなんで」ときいていました。祖父は砲兵工廠の鋳物工をしていて、昔、鋳物がかかってとれたんやと。また、写真で見たのですが、鋳物を納めるときは祖父も神主さんみたいな格好をして、ご祈祷なんかをして鋳物をつくったと言っていました。

池永 地域の祭りや地藏盆の伝承なども大事ですね。

藤田 ええ。地藏盆は京都もそうですが大阪でも盛んです。どの路地にもいていお地藏さんが祀ってありました。今でも空堀では地藏盆のときは、新しい赤い涎かけをかけて、路地の者がみなお供えをします。路地の入口に棹竹を渡して

提灯を下げるのですが、当時、提灯は子どもが生まれたら必ず誂^{あつら}えていました。

混じることから生まれるもの

池永 加藤先生のお話にもありますが、新旧の混じりあいということはとても重要なキーワードだと思います。

「まじる」には2つあります。「混じる」と「交じる」。たとえば食についてなら、「混じる」は、元の食材を見えなくするようにまぜることで、「交じる」は、まぜても元の食材が見えるようにまぜること。私は、大阪の本質は、前者の「混じる」ことだと思います。

その混じりあいには「世代」の混じりあいがまずあります。赤ちゃんからシニア、都市で学ぶ人、働く人とかが混じりあっています。日本人も海外からの人も、都市に住む人、学ぶ人、働く人、都市を訪れる人が混じりあいます。

「目的」の混じりあいもあります。住まい、商業、工場、学び、ライフサービス、スポーツ、芸術など、様々な機能が同時に存在し、つながりあって、都市のなかに適切な場所に、絶妙なバランスで配置されるわけです。それから、「時間」の混じりあい。老舗料理店とか、菓子屋、道具屋などずっと続くものがあり、一方で、レストラン、パン屋、雑貨店などでは、新たな発見や刺激を受けます。古い建物と新しい建物も同様で、長い時間が同じ場所に混在することで活力が生みだされるわけです。現代に承継されているライフスタイルや商習慣に触れることで、本質がつかめることもあるでしょう。

この「混じる」は、ものづくりではとても大切なこと。しかし、そこには絶妙なバランスが必要です。そのバランスは「五感」でつくられます。「五感」は地形とか気候とか自然とかの風土によって、日々形成されるものでしょう。この新旧の混じり合いということでは、佐藤さん、どうお考えでしょうか？

佐藤 伝統的な産業と新しい生産が混じり合うというのは、遺跡から出てくるもののなかにも見受けられます。特に近世では、都市では新しい試作品的なものをつくって市場で試し、受けがよさそうなのは大量生産に回していくようなことをしていたと思われます。小規模生産で流

行やニーズの最先端をつかむというのを大坂というまちでやる。その後に、近世の陶器でいうと、肥前や美濃などの産地で大量生産に移していくわけです。

また、瓦屋町遺跡でも多様な生産の混じりあいが見られます。メインは瓦^{いば}づくりで、瓦は燻^{いぶ}して焼きますが、同じやり方で火鉢などの大きな土製品をつくっています。また、金属の鑄造用の鑄型をつくることもしました。陶器づくりの仕方も、型を使って陶器をつくるやり方と人形つくりとが結びついていました。

さらに、陶器の釉薬^{ゆうやく}からも、いろいろな試みがなされていたことがわかります。釉薬は、金属の原料によって色がつけられます。例えば銅では緑や赤が出るし、ペンガラで赤とか黒を出すとかです。それも



金属加工と密接に関係しているということで、近接した工場のなかで、いろんな試作や実験ができたのではないかと思います。大坂は商業のまちというイメージがありますが、実は手工業の盛んなところ。最先端に行くような産業があったわけです。**池永** 実験場でもあったということですね。先に申し上げた、深圳などでもアイデアがすぐ商品になりました。また、それを他の都市とも連携しながらやっていくかたちで、昔の大坂もそんな都市であったと思います。

佐藤 もうひとつ、これは近代の例ですが、以前の「今昔フォーラム」でテーマとなった100年ほど前に活躍した画家、堤 檐次郎さんの絵のなかに、生野区あたりで植木鉢工場の窯の絵がありました。農村では植木鉢は不要なわけで、植木鉢

はしごく都市的な製品です。けれども生産には火を使うので、これは郊外で焼く。まちの周縁にそういう工房が位置することになります。都市ならではの需要に対応するものづくりだったのでしょう。

加藤 確かにそう、うちの田舎の家には植木鉢はひとつもなかった(笑)。工業化してくると生産の現場は周縁に配置されていくというのはもちろんあるでしょう。それだけ大量に生産されていたということは、おそらく販路も確立されていたということですね。外部からもいろいろなものが入ってきて、それが新しい刺激になったようにも思われます。

佐藤 陶磁器で言うと、おそらく先端のことは都市でやるけれど、あとは大生産地にまかせる方がコスト面でも有利で、買った方が楽だったのではないかと思います。例えば、堂島で焼いていた京焼に似た焼き物ですが、これを有田でつくり、しかも「清水」という印があるものが大坂で出回っていたことがあります(笑)。

また、商品の流通量の話になると、まちなかで発掘していると江戸時代の18世紀後半になると、出てくるものの量がぐんと増えることに気づきます。明らかに物質的に豊かになっているのが感じられます。経済が発展し、生活のレベルも上がっていると思われます。ミニチュアの土製品、土人形などもその頃から増えますし、箱庭の道具なども出ていますが、それは子どもの遊具ではなく、趣味でつくるようなもので、生活のゆとりを感じさせるものです。

都市は本来は生産の場

加藤 都市というのは、やはり本来は生産の場であったと思われます。農業にしても都市的なものでした。京都の例がわかりやすいのですが、壬^{みづ}生^{なま}菜にしても九条葱^{ねぎ}にしても賀茂茄子も、今は滋賀県とかでつくられています。清水焼も郊外に移転しましたが、生産の場は常に都市の外側へと移っていくわけです。この、ものをつくる場が常に郊外化していくということと、都市がもつポテンシャルというところには、なにか深い部分で関わりがあるのではないかと感じています。

藤田 混じりあうということでは、私にも思うところがあります。路地の人たちも、いろんな地方から来た人、若い人たちも混じっているんな試みが行われています。

これも、昔の話ですが、表借家のお魚屋さんでは、冬になると、魚を入れる木のトロ箱を壊して一斗缶の中で焼やしていました。たき火があると、学校帰りの子どもらが寄ってくる。火に当たりながら、魚屋のおじさんに、親や先生に言えないようなことも話していくわけです。「今日のテストの点、悪かってん」とか。すると、「そんなもん、ここで燃やしていき」とか(笑)。そういうコミュニケーションがありました。火を仲立ちにして普段しゃべらんことまでしゃべっていた。そういうのを私は面白いなあと書いて書き留めたりしていました。

最近では、うちの路地の奥で塾をしている人があります。10坪の家をそのまま使っていて、それも、勉強を教えるだけじゃなくて、落語を覚えたり、演じたりと面白い試みをされています。土曜日になると、地域の子ども以外の姿も路地に見られて、私はいいなあとと思っています。今では、この路地、建て替えないでよかったと思います。

うちの路地とは違いますが、若い人たちが長屋で工房をしたりもしています。ひとりで、アクセサリーづくりとか、いろんなお店をやっています。住居と店舗を兼ねているし、家賃も手頃で挑戦的なことがはじめやすい。若い人とお年寄りが混じってやっている様子が見受けられます。そのとき、お年寄りに、その路地の習慣なんかを教えてもらっています。「自転車は邪魔にならんように置きや」とか。「あそこに挨拶に行っときや」とか(笑)。

最初に聞いておかないとあとからは難しい。挨拶なしで路地に入ってくる人もたまにいますが、気まずいままになる。道が狭い路地では、互いに挨拶なしではすれ違えないし、雨の時はお互いに傘をかしげないと通れない。そういう風な習慣はとってもいいのでは？ 若い人もいろんな新しいことをもって入ってこられます。今は、また路地で、いろんなものが混じりあいながら気持ちの贅沢^{ぜいたく}ができる空間になればと思っています。

池永 路地というのは家でもないし、外でもない、その周りの人たちの共通の場。お互い様という空間ですね。そういうことを育てていくことが、世界で住みたいまちにもつながるように思います。

失うことにも目を凝らしたい

池永 残したい「大阪の音」は？ というアンケートで、以前上位に入ったのは、お寺の鐘の音でした。会場に、應典院の秋田住職が来られていますが、いかがですか？

秋田光彦さん

下寺町の應典院住職の秋田です。古くからお寺は癒しとか学びとか楽しみとか日本の公益的な役割



を担っていたのですが、今日の制度やサービスとは違って、一番底にあるような喜びや悲しみを引き受けて、みんなでつくりあげてきた公共の広場といったものがお寺の原点だと思っています。

今日、お話をうかがっていて、ものづくりとか、まちづくりとかという際に、つくることが前提になっていますが、失うとか、やめにするというような話はどうなのかと、ふと思います。

今は、年間140万人が亡くなる多死の時代で、みんなが孤立しています。大阪市は単身世帯が全国一ですし、無縁の仏、火葬場で引き取り手がない方も全国一多い。そういう、人々が何かを喪失することとは、ものづくりとかまちづくりという観点からは、どう捉えるべきなのでしょう。そういうものは、絶えず損失であり、ロスであると、とても否定的な受け止め方がありますが、その一方で、介護や医療の世界ではナラティブアプローチといって、死に行く人や非常に重い病を抱えた人に物語を語ってもらいながら解決法を見出していく手法があります。それをまち全体に喩えた場合、非常にたくさんの課題を背負っている私たちの大阪のなかで、あえて計画とか生産という見方を少し置いて、「喪失」や

「減退」ということにもっと目を凝らす態度がこれからのまちづくりにはむしろ必要になってくるんじゃないかと思ったりします。

大阪は実は全国2番目に寺院が多く、なかでも上町台地は、お寺の集積区です。それは、消費生産の都市において、明らかに異なる時空観をもっています。それを、単に観光資源、歴史資源というのではなくて、どう捉えていくべきかが難しいところ。京都の場合とちがって、大阪には中小のお寺が多い。それはリアルに地域の人々の生死にかかわってきたことですね。それを、この時代における資源として、今の大阪に届けられるのかに、私は非常に関心をもっています。そういう観点から、加藤先生どうお考えでしょうか。

加藤 大阪というまちで、単身で亡くなって引き取り手がない方が多いということは、この都市には身寄りがいても引き取ってもらえない、社会的な関係から最後に切り離されてしまった人が多いということでもあるでしょう。逆に言うそういった人たちが自分の生きる空間として選んだのがこの都市であるというような言い方もおそらくはできます。事情はどうであれ、このまちには、そうした人たちを受け入れる、ある種の懐の深さというものがあるわけです。何らかの居場所が確保できているということ、ある意味で積極的に見ているのではないかと思います。今日は、テーマの設定から、ものづくりから都市を考えようと、私もそれに沿って考えてきましたが、今のご指摘はとても重要な視点だと思いますし、立ち位置によって捉え方、考え方も変わってくると思います。

藤田 確かに最近はぎすぎすしたことが多いですね。これも姑にきいた話ですが、うちのお墓にしても、知らない人の名が書いてあったりするんです。姑によると、昔にうちにいてた職人さんやけれど、ずっと一人身やったから、えらいよくしてくれたので、我が家のお墓にということでした。文化時代にできたお墓で、京都にお参りに行ったとき、姑が教えてくれました。伝承というか、私は祖父母との無駄話のなかから、いろんなものを学んで吸収しました。今の子どもたちにもそういう栄養が必要

に思えます。何となくの雑談からいろんなことを身につけないといけないのではないかと今日、改めて思いました。

佐藤 そういうものが醸成される空間という意味では、文化財保護の立場からは、町家とかしつらいみたいなことを形として残すのはとても大事なことだと思っています。京都では京町家を残そうということで、条例ができたりしていますが、大阪ではなかなか実効性がある動きが出てこない。きちんと進めていくべきだと感じています。

亡くなられる方というお話の関連では、墓地も都市の成り立ちを考える上ではとても重要です。例えば、大坂七墓。近世から近代まであった墓地で、かつては七墓巡りも盛んだったと言います。最近の発掘例で言うと梅田墓ですね。大阪駅の北側で大規模な発掘が行われました。墓石を見ると、地方から出てこられた方が多いのもわかります。

産業の集積には背景がある

池永 「今昔タイムズ」11号にコメントを寄せられている吉村さんは、ご意見どうでしょうか。

吉村健一さん

生野区で、たこ焼き、お好み焼き、ベビーカステラ、イカ焼きなどの営業用ガス機具をつくらしている旭進ガス器の吉村です。



生野、東成、東住吉とか、東大阪市のあたり、上町台地から生駒にかけての間あたりは、どこを掘っても井戸水がたくさん出ました。このため昔から水をたくさん必要とする職業が多いんです。たとえば、銭湯が数多くありました。水代がかかるので、みな井戸水を使った。銭湯の仕事では、最後に掃除して洗うのに水を使いました。冬でも冷たい水。それで、経営も石川や福井県出身の人がやっていることが多かった。それから、生野区の田島には昔から眼鏡屋が多いですね。レンズを磨くのきれいな水が必要だし、磨いた

あとの排水のために川も必要でした。

大阪に来たら仕事があると言うことで、全国から人がやってきました。昭和30年代には九州の炭鉱が閉鎖され、その労働者がたくさんやってきました。もうひとつ、朝鮮からも大勢の人たちがやってきました。一軒の家に数人が住んで、屋根裏部屋まで使った。それで銭湯が必要でした。

現在では、たくさんの工場があるなかで、零細のものづくりは下請け仕事になりますが、それぞれ専門があつて技術はすばらしい。一社でなにかもはできないですが、各社をつないでいくと素晴らしいものが低コストでできあがる。つながりがあるために仕事が回ってくるわけです。

今の子どもは、お父さんがどんな仕事をしているのかをほとんど知りません。どんなまちに住んでいるのかも知らない。今グローバル化で、こういう子どもたちが外国の子たちと交流しても、あなたはどこから来た、どんな人かときかれも答えられない。私たちがこうしてやってきたことを次の時代にいかに伝えることができるのか、こういう仕組みにしていけるのか。これから先のことがやはり心配です。

実は、大阪はものすごく財産を持っているんです。ただそれを活用しきれていないのが現実です。大阪は、ここで何かが育ったら東京に持っていかれてしまう。でも、東京がいくらがんばっても持っていけないものは、歴史です。それをもっともつといういろんな面で活用していけば、50年100年後でもすごく面白いまちになっていくはずです。大阪の人はバイタリティがあるから、知恵を出せば、まだまだ面白い人たちがたくさん出てくるまちになると思います。

佐藤 田島の周辺を歩くと、眼鏡屋さんが確かに多い。銭湯の名まで「めがね温泉」でした(笑)。吉村さんのお話で、用水と排水という背景がよくわかりました。も

うひとつ、東京になくて大阪にあるのは歴史であるというのは、もっと私たちが発信をしていかないといいことだと思います。歴史というと、奈良とか京都とかと言われそうですが、平城京、平安京よりも古い難波宮もあり、首都になったこともあるにもかかわらず、確かにあまり知られていません。自分たちの努力不足を感じます。

コモンズの重要性を見直す

酒井裕一さん

大阪くらしの今昔館館でボランティアをしています。防災で自助、共助、公助という考え方があります。助



け合うだけでなく、地域のつながりなども、家族ということに限定せずとも、まちのコモンの部分が媒介して、子どもたちに引き継いでいくという、共の機能がやはり大事かと思いますが、いかがでしょうか。

加藤 私も、実は築90年くらいの京町家の借家人なんです。来年度の町内会の会長を拝命して、地蔵盆を成功させないといけない(笑)。30軒くらいの両側まちの町内で、お年寄りが多いのですが、ほとんど子どもがいらないのが現実です。それでも、台風の時などは、比較的若い自営層の人たちが近所の高齢者のところを見て回ったりしていました。コモンズという、地域の顔のつながりがある生活空間の単位というか、日常生活レベルの空間単位の共助を考えていくことは、やはり重要だと思います。

池永 私も、ものづくり、まちづくり、地域や家族の和というものも含めて、再構築する時期が来ているのではないかと思います。本日は面白い議論ができました。ありがとうございました。👤



休憩時間には上町台地の立体模型の周囲に多くの人が集まった。この模型は、2008年9月に開催したNEXT21/U-CoRo ウィンドウ・エキジビション第6回「震災ゲームで気づく上町台地の暮らしいろいろ」の際に作成。地域の地形特性を知って減災の意識を深める資料とした模型を今回よみがえらせた。